〈長崎県病院企業団通信〉

ふくよか

地域で支える医療と介護

2026 秋号
■長崎県病院企業団本部
■令和8年10月発行



国の特別史跡「原の辻遺跡」(壱岐市)

「ふくよか」の由来

医療人として患者さんに寄り添った会話が自然と出てくるような能力を付けて欲しいとの願いが込められています。

CONTENTS

P1 ―― 企業長より
P2 ―― 夏季ワークショップin五島
P3 ―― 遠隔医療システムの導入／令和8年熊本地震の災害派遣に係る活動報告
P4 ―― 病院で働く特定技能外国人・技能実習生
P5 ―― カスタマー・ハラスメントに対する対策指針の策定／ 看護職員の確保・育成
P6 ―― 診療看護師(NP)の確保・育成について
P7 ―― BREAK TIME

vol.49

医療のトリレンマ 三角形の「180度」が示す医療制度の限界

長崎県病院企業団企業長　八橋　弘

小学5年生は算数の授業で「三角形の内角の和は180度」であることを学ぶ。教師は、なぜ三角形の角度の合計が180度になるのかを子どもたちに説明しなければならない。三角形では、どれか一つの角度を広げれば、他の角度は必ず狭くなる。三つの角度を同時に最大化することはできない。この単純な算数の構造は、実は現在の日本の医療制度が抱える本質的な課題とよく似ている。

１９９４年、米国の医療経済学者William Kissickは、著書『Medicine's Dilemmas』の中で、医療制度が同時に満たすことが極めて難しい三つの要素を「Medical Trilemma（医療のトリレンマ）」として定式化した。「ジ（di）」は「２」、「トリ（tri）」は「３」を意味するギリシャ語由来の接頭辞である。二つの選択肢の間で板挟みとなる状態を「ジレンマ」と呼ぶのに対し、三つの要素が互いに衝突し、身動きが取れなくなる状態を「トリレンマ」と呼ぶ。

Kissickが示した三つの要素は、①医療の質（Quality）、②医療へのアクセス（Access）、③医療費の抑制・持続可能性（Cost / Sustainability）である。この三つは同時に最大化することができない。どれか一つの角度を広げれば、他の角度は必ず狭くなる。まさに三角形の「180度の定理」そのものである。

医療の質を高めれば費用は増加する。アクセスを広げれば、それを支える人材や設備が必要となる。一方で費用を抑えれば、医療の質やアクセスの低下を招く可能性がある。医療制度は常に、「三つの角度のどこを広げ、どこを我慢するのか」という選択を迫られているのである。

このトリレンマは、国ごとに異なる形で現れている。英国では、国営医療サービス（ＮＨＳ）により、国民は比較的低い負担で医療を受けることができる。しかし、その代償として、専門医受診や手術まで数か月以上待たなければならないこともあり、迅速性や医療の質の維持が課題となっている。米国では、世界トップレベルの医療技術や先進医療が提供されている。一方で、高額な医療費や保険制度の違いにより、医療へのアクセスには大きな格差が存在する。日本は、国民皆保険制度とフリーアクセスによって、高い医療水準と受診のしやすさを両立してきた。しかしその一方で、医療費は年々増加し、医療従事者の負担や地域偏在など、制度の持続可能性が大きな課題となっている。

医療のトリレンマは、人口減少や高齢化が進む地域において、さらに厳しい形で現れる。長崎県の離島医療はその象徴である。離島に病院や診療所を維持し、24時間救急や分娩体制を確保すれば、医療へのアクセスは守られる。しかし、人口規模が小さいため症例数は限られ、医師の負担は増大し、医療の質の維持が難しくなる。さらに、財政面では持続可能性が揺らぐことになる。逆に、分娩や急性期医療を本土へ集約すれば医療の質は向上する。しかし、住民は長時間の移動を強いられ、医療へのアクセスは低下する。離島医療は、三つの角度を同時に広げることができないというトリレンマの本質が、最も鋭く表れる領域なのである。

完全な解決策は存在しない。しかし、「質」「アクセス」「持続可能性」の三要素のバランスを、より高い次元で実現しようとする取り組みは着実に進んでいる。例えば、急性期高度医療の集約化、遠隔医療やドクターヘリによるアクセスの確保、AI診断支援や医療 DXを活用した効率化、さらには予防医療の推進などである。こうした新しい技術や仕組みは、三角形の形そのものを少しずつ描き直し、「質」「アクセス」「持続可能性」をより良いバランスへ近づける可能性を秘めている。

長崎県病院企業団もまた、離島・へき地医療の最前線で、このトリレンマと日々向き合っている。限られた医療資源の中で、「質」「アクセス」「持続可能性」の最適なバランスを模索しながら、住民が安心して暮らし続けられる地域医療を守ることが私たちの使命である。

医療のトリレンマは、単なる制度論ではない。地域がどのような「命を守る仕組み」を選択するのかという、社会全体の意思決定の問題である。すべてを同時に満たすことはできない。だからこそ、住民、行政、そして医療機関がこのトリレンマを理解し、「何を優先し、何を支え合うのか」を共に考えることが重要である。そのような合意形成の積み重ねこそが、地域医療改革を前進させる最大の原動力となる。

三角形の内角の和が180度であるという定理を変えることはできない。しかし、その三角形をどのような形に描くかは、私たち自身が選ぶことができる。長崎の離島・へき地医療の未来もまた、地域で暮らすすべての人々が知恵を出し合い、それぞれの地域にふさわしい三角形を描いていくことによって築かれるものである。長崎県病院企業団は、これからも地域住民とともに、それぞれの地域にふさわしい「医療の三角形」を描き続けてゆきたいと考えている。

夏季ワークショップ in 五島



長崎県では、県医学修学資金貸与制度や自治医科大学派遣制度を利用している医学修学生に対して、医学部生の段階から地域医療への理解を深めてもらうため、毎年夏と冬にワークショップを開催しています。

今回で49回目となる令和8年度の夏季ワークショップは、1～3年生を対象として8月24～25日に五島市で開催し、1日目は自動飛行ドローンによる医薬品配送に取り組んでいる企業や過疎地域の医療を支えている診療所、五島市の中核病院である五島中央病院の施設見学を行うとともに、将来展望を考える機会にもなるよう行政・病院関係者からの説明、先輩医師との座談会、参加者全員による交流会を実施しました。2日目には長崎大学「離島・へき地医療学講座」の学生の皆さんと共同して、離島・へき地でクリニックや訪問看護ステーションを運営する3名の代表者による講演を聴いた後、「地域医療と多職種連携」をテーマとしたワークショップを行いました。

今回は1～3年生54名が参加し、医療現場を肌で感じたり、ワークショップで活発な議論を行ったりすることで、2日間を通じて地域医療に関する理解を深めるとともに、先輩医師や医学修学生相互の交流を深めることができました。離島・へき地の医療を実際に見て、聞いて、考える経験を通じて、地域医療の魅力や課題を実感する貴重な2日間となりました。

遠隔医療システムの導入（上五島地区）
～離れた場所からでも、医師とつながる医療

令和7年10月から、上五島病院と2つの附属診療所（有川医療センター、奈良尾医療センター）や町内の福祉施設を、オンラインでつなぐテレプレゼンスシステム「窓」※を導入しました。今回の導入により、医療センターを受診する患者や福祉施設の入居者の皆様が、上五島病院とオンラインでつなぐことで、医師が画面を通して患者や入居者の皆様の様子を確認しながら診療できる環境を整えました。

上五島地区では少子高齢化が進む一方、交通手段が限られているため、病院への通院が大きな負担となっており、このシステムで医療センターや福祉施設にいながら上五島病院の医師による診療を受けられることで、患者や入居者の皆様の通院の負担や福祉施設職員の移動の負担を軽減し、住み慣れた地域で安心して医療を受けられる環境づくりが進みます。

また、遠隔医療を活用することで、医師をはじめとする医療スタッフを地域全体へ効率的に配置できることで、町内で必要な医療を提供し続けられる体制づくりが期待できます。



「窓」を活用した診療

※テレプレゼンスシステム
離れた場所にいる人同士が、カメラや大きな画面を通して同じ場所にいるように顔を見ながら会話できる仕組み

令和8年 熊本地震の災害派遣に係る活動報告



【島原病院】
本部の活動指揮として、参集したDMATの管理や活動指示、今後必要なDMAT隊数算定、資源量の確定等を行いました。



【精神医療センター】
本部活動として搬送調整・物資支援、希望が丘病院指揮所にて患者搬送支援を行いました。また、避難所を回り、地域住民の診察を行いました。



【壱岐病院】
本部にて島原病院コーディネーションチームの補助要員として、DMAT隊員、隊員管理業務、事務作業などのサポート等を行いました。



【上五島病院】
本部で医師や看護師などは診療応援を行い、ほか本部活動やDMAT隊の参集受付業務なども行いました。



【五島中央病院】
本部を中心に医療支援活動を行いました。現地社会福祉協議会職員に同行しボランティアの要請があった家屋調査などを行いました。

病院名	派遣期間	派遣場所	業務内容
精神医療センター	7/31～8/5	熊本県DPAT調整本部（熊本県庁）など	・精神科医療及び精神保健活動の支援
島原病院	7/29～8/1、8/8～8/12、8/20～8/24	7/29～8/1 熊本県県央南活動拠点本部（済生会熊本病院：熊本市） 8/8～8/12、8/20～8/24　熊本県内被災地域	・本部活動 ・避難所支援業務
五島中央病院	8/8～8/14	宇城広域連合事務局（宇城市）など	・応急作業、ロジ等
上五島病院	7/30～8/1	熊本労災病院（八代市）	・診療支援、活動拠点本部の活動指揮
壱岐病院	7/29～7/31	済生会熊本病院（熊本市）	・救急外来の対応（夜勤含む）

病院で働く特定技能外国人・技能実習生

病院企業団では、介護職員としてミャンマーから特定技能外国人や技能実習生を受け入れています。現在、上五島病院で4名が活躍されていますので、インタビュー形式でご紹介します。

Q 介護の技能を学ぼうと思ったきっかけは？

A ●私の祖母は10年くらい糖尿病になり、なかなか治らないため入退院を何回もしました。約1か月入院した時、私が祖母の介護をしましたが、できないことが多くて他の人に聞きながら介護をしました。やってみたら面白くなってきて介護について興味を持ちました。それで介護について学ぼうと思い勉強を始めました。

●昔からお年寄りと接することが好きで、人の役に立つ仕事をしたいと思ったからです。専門的な介護の技術や知識を身に着け、患者さんのサポートをしたいと考え勉強を始めました。





Q 現在はどのような仕事をしていますか？仕事をしていて、やりがいや楽しいと感じることは何ですか？

A ●現在は、病院で利用者さんの食事や入浴、移動の介助、コミュニケーションをとる仕事をしています。患者さんから「ありがとう」といわれたときに、とてもやりがいや楽しさを感じます。

●現在は介護の仕事をしています。この仕事はやりがいのある仕事です。私は患者さんと一緒に話したり、歌を歌ったり、料理を作ったりしたいので楽しいです。患者さんが私の名前を覚えてくれて、ありがとうと言われたときは楽しいです。



Q 日本での生活で、「驚いたこと」や「母国との違い」を感じたことはありますか？

A ●日本の街がとてもきれいで、交通機関が時間通りに来ることに驚きました。

●日本の街や交通機関の時間の正確さ、マナーの良さに驚きました。



Q 技能を生かしてこれから挑戦したいことや、将来の夢を教えてください。

A ●母国に介護の教室を作って先生になることです。

●介護福祉士の資格を取り、もっと知識や介護技術を身に着けることです。

Q 一緒に働く皆さんへメッセージをお願いします。

A ●最初に来た時文化とか技術とかを教えてくれたり、いつも休みの日にどこかに連れて行ってくれたり、日本の美味しい食事を作ってくれたりと日本の生活に慣れるようにやさしく教えてくれて本当にありがとうございました。

●日本に来てわからないことが多いけれど優しく教えてくれてありがとうございました。困ったときもいつも相談にのっていただき本当にありがとうございました。皆さんのおかげで仕事もできました。これからも頑張ります。

●いつも優しく仕事や生活のことを教えてくださり本当にありがとうございます。これからも精一杯頑張りますので、よろしくお願いいたします。

これからも各病院での活躍が期待されます。今後ともよろしくお願いします。

診療看護師（NP）の確保・育成について

～10年間の感謝と、これからの看護をみんなで創る～

病院企業団本部　主幹 庄山由美

長崎県病院企業団に入職して、いつの間にか10年を迎えました。振り返るとあっという間でしたが、現場での臨床から組織全体のキャリア開発まで、非常に濃密で感謝に満ちた10年間でした。

当初数名だった企業団の診療看護師（以下、NP）は、現在7名に増え、令和9年度にはさらに3名が加わる予定です。このように着実に仲間が増えてきた背景には、現場と組織の双方が一体となって進めてきた「確保」と「育成」の取り組みがあります。今回は、これまでのNP確保・育成の取り組みと、今後の展望についてお伝えします。

1. 現場（臨床）における育成：地域医療から学んだNPの本質

私の最初の赴任先は壱岐病院でした。離島という環境のなか、NPとしてどのような役割を果たすべきか模索する日々でした。赴任当初、厳密な血糖管理を行おうとした際、患者さんが離院してしまう出来事がありました。当時の私は「患者さんの問題」と捉えてしまいましたが、実は自分の思いを押し付け、患者さんの思いに寄り添えていなかっただけではないか――そう気づき、猛省したことを今でも鮮明に覚えています。

「患者中心」の視点に立ち、患者さん・ご家族・医療スタッフをつなぐ「ハブ」となって、生活背景まで踏まえたケアを提供する。医師と協働しながら高度な診療補助を行うだけでなく、職種の垣根を越えてチームで支え合う――。この離島医療での学びこそが、NPとしての私の原点であり、育成の根幹となっています。

温かく迎えてくださった現場の仲間たちの存在があったからこそ、NPが安心して成長できる基盤が作られたのだと深く感謝しております。

2. 本部・組織における確保と育成：キャリア支援体制の構築

臨床現場での経験を経て、本部では「看護人材育成キャリア開発委員会」の発足に携わらせていただきました。各企業団病院から現場の生の声を持ち寄り、組織全体での「キャリアラダー」の導入・整備を推進しました。これは、NPの「確保」と「継続的な育成」における大きな転機となりました。単に人材を集めるだけでなく、離島・へき地医療を担うNPがどのようなプロセスを経て成長し専門性を発揮できるかを整理しながら、「NP大学院卒後研修プログラム」の構築や、年に1度の「診療看護師交流会」の開催を実現してきました。個々の成長過程を間近で体感できたことは大変感慨深く、組織としてNPを支える仕組みづくりの重要性を実感しております。

ナイチンゲールは「進歩のない看護は、看護ではない」という言葉を残しました。私たちは、離島・へき地医療ならではの強みや温かさを活かし、看護職が「自分の専門性をのびのび発揮できる」「私の看護がこの地域を支えている」と笑顔と誇りを持って働ける職場を目指していきます。

3. これからの確保・育成に向けた想い

日野原重明先生の「出会いこそが人生を豊かにする」という言葉があります。この10年間、私は患者さんや医療チーム、企業団のすべての皆さまに支えられてきました。今後は、この「出会い」への感謝とともに、皆さまと共により面白く新しい看護の未来を創っていきたいと思います。

そして、NPが生き生きと活躍する姿を魅力とし、次世代の看護職やNPを引き付け、新たな人材の確保（「ここで働きたい」という動機形成）へとつなげて、共に育っていく環境づくりに尽力してまいります。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

カスタマー・ハラスメントに対する新たな対策指針

病院企業団では、令和6年度から「ハラスメントの防止等に関する要綱」に新たにカスタマー・ハラスメントを位置づけ、ハラスメント防止リーフレットの更新や研修会の実施など防止対策に取り組んできました。

令和8年10月から改正労働施策総合推進法が施行され、全ての事業主にカスタマー・ハラスメントを防止するための雇用管理上の措置を講じることが義務付けられたことを踏まえ、対策をより詳細に具体化し、職員の皆さん方が安心して働くことのできる環境を整えるため、「長崎県病院企業団カスタマーハラスメント対策指針」を策定しました。

指針では、カスタマー・ハラスメントの判断基準、対応について初期段階からの手順や類型別の対応などを定め、職員個人に対応を委ねるのではなく、組織として適切に対応することを明確にしています。

患者・ご家族の皆様からのご意見・ご要望は、より良い医療の提供につながる大切な声として、これまでと同様、真摯に受け止めてまいります。

一方で、社会通念上相当な範囲を超え、職員の尊厳や安全、就業環境を損なう行為については、適切に対応します。職員一人ひとりが安心して業務に取り組める環境を整えるとともに、患者・ご家族の皆様との信頼関係を大切にし、より良い医療の提供につなげてまいります。

令和8年度 アイランドナースリフレッシュ研修・交流会





8月6日に、長崎市でアイランドナース（長崎大学病院、長崎医療センター、九州医療センターから派遣）の皆さん方の研修・交流会を実施し、各離島企業団病院で勤務されている9名が参加されました。企業団本部の庄山主幹よるキャリア形成をテーマにした講義のほか、ワークショップにおいては前職場とのギャップや各離島病院での学びやエピソード、今後の抱負について互いに報告し交流を深めました。

県看護協会の「2026看護への道フェア」へ参加

8月1日に長崎県看護協会・長崎県ナースセンター主催の同フェアが行われ、中学生や高校生、その保護者等が来場され、現役の看護師・助産師・保健師や看護学生から仕事の紹介や進路相談、疑似体験等により、看護職への関心を持ってもらう機会となりました。

企業団病院からも「しまのナース」として、五島中央病院の久保桂看護師と上五島病院の萬屋あすみ看護師が参加し、離島医療における看護の現状ややりがいを、本部職員からも修学資金制度や教育体制の説明等を行い、しまの看護や企業団の看護職員の魅力についてお伝えしました。



修学資金制度の詳細はこちら▶

企業団の仕事や私生活を楽しみながら
働く看護職員をクローズアップしてご紹介しています。
ぜひご覧ください。▶

～看護職員の確保・育成～

坂本龍馬と長崎

今年は「長崎さるく」が、長崎さるく博'06から始まって20年の節目の年となり、期間限定コースや特別企画などあるようです。私も2009年から暫く、さるくガイドをやる機会を得て、主に坂本龍馬ゆかりの地や原爆落下中心碑などのコースを案内しました。特に2010年に放送されたNHK大河ドラマ「龍馬伝」は本県出身の福山雅治氏が演じる龍馬など、幕末を彩る豪華なキャスト陣が大きな話題を呼び、沢山の観光客が長崎を訪れました。当時、風頭公園から寺町まで下る2時間半のさるくコースは連日大盛況になっていました。大河ドラマの影響は本当に凄いものです。変革の時を駆け抜けた幕末の風雲児・坂本龍馬は高知県の生まれ、土佐藩を脱藩後、神戸海軍操練所に学び、操練所が閉鎖されると薩摩藩の庇護を受け長崎にやってきます。今回は、長崎市内の龍馬ゆかりの地を長崎駅前周辺から幾つか訪ねてみたいと思います。皆さんも龍馬など群雄たちが、大いなる夢と希望を抱いて闊歩した町並みを志士の気分でさるいてみてはどうでしょうか。

まずは幕府の軍艦奉行並だった勝海舟らとともに、長崎に初めて来て約40日間滞在した「福済寺」。このお寺の境内で龍馬と海舟が相撲をとったというエピソードもあります。現在では、原爆被災者と戦没者の冥福を祈って建てられた「万国霊廟長崎観音」が、長崎の街を静かに見渡しています。


風頭公園（坂本龍馬之像）

続いて「聖福寺」は、1867年に海援隊が伊予大洲藩からの借上船・いろは丸と紀州藩船・明光丸とが衝突した「いろは丸事件」の賠償問題の談判が行われた場所です。龍馬はこの事件の解決に命を懸けていました。丸山で「船を沈めたその償いは金を取らず国を取る」という歌を流行らせ、世論を味方につけました。当時土佐藩側のトップは参政・後藤象二郎、紀州藩は結果として83,500両の賠償金を支払うことになりました。少し歩くと「長崎歴史文化博物館」、元は長崎奉行所立山役所跡ですが、1867年に長崎寄合町の路上で2人のイギリス人水夫が殺害されたイカルス号事件の審判が行われ、龍馬ら関係者が集められました。

最後に亀山社中の跡に整備された「亀山社中記念館」、亀山とはこの周辺の地名、社中とは同志・仲間の意味です。1865年夏頃、長崎商人・小曽根家などの援助を受け、龍馬は日本初の商社といわれる亀山社中を結成します。主な活動内容は倒幕を目的とした政治活動や運輸業、商業活動などです。後に1867年4月に海援隊となり土佐藩の外部団体に改編されるまで、活動は2年ほどですが、幕末史に大きな足跡を残しています。この建物は1964年、司馬遼太郎氏の取材により全国から保存を求める手紙が多数寄せられ、保存されることになったものです。近くにある「若宮稲荷神社」は天皇の忠臣だった楠木正成の守護神（稲荷大神）を奉斎したと伝えられ、龍馬をはじめとした勤皇志士たちが参拝したことから勤皇稲荷とも呼ばれていました。毎年10月14日、15日の大祭に奉納される「竹ン芸」は白狐に扮した若者が、高さ10mある2本の青竹の上で囃子にのって妙技を見せます。

このほかにも新上五島町など県内には龍馬ゆかりの地がいくつかあります。

最後に恒例の心に残った一言、坂本龍馬の残した言葉に「我がなす事は我のみぞ知る」がありますが、人に流されず信念を貫く龍馬の覚悟、気概にあふれた一句です。

（文：副企業長 馬場秀喜）

BREAK TIME

編集後記

朝夕の涼しさに秋の深まりを感じます。早いもので、今年も残り2ヵ月となりました。これから少しずつ忙しくなる季節ですが、旬の美味しいものやキレイな景色など小さな楽しみを見つけながら過ごしたいです。[S.O]

表紙・裏表紙写真提供：（一社）長崎県観光連盟

令和8年10月発行
編集・発行／長崎県病院企業団本部
〒850-0035 長崎市元船町17-1 長崎県大波止ビル7階
TEL.095-825-2255 FAX.095-828-4759
[E-mail] honbu@nagasaki-hosp-agency.or.jp
[U R L] https://www.nagasaki-hosp-agency.or.jp
◎上記メールアドレスに記事についてのご意見・ご感想を どんどんお寄せください！

地域で支える医療と介護
NAGASAKI HOSPITAL AGENCY
長崎県病院企業団 検索

長崎県病院企業団
ホームページ